

優秀賞

高校生部門〈家族の死〉

私立麗澤瑞浪高等学校3年

橋本 容行

父の日記

父の闘病生活が始まったのは僕が小学二年生の時だった。癌だった。後になって聞いた話だが、癌が発覚したころはすでに末期だったそうだ。一年間続いた父と癌の戦いは父にとっても母や僕、弟や妹にとっても過酷なものになった。母は、日中に仕事をして夜は車で四十分かかる病院へ通う日々を繰り返した。僕は学校から帰ってくると幼い弟と妹の面倒を見た。お見舞いにもいった。だんだん弱っていく父を見るのは辛かった。祈ることしかできなかつた。

結局、僕が小学三年生の秋に父は死んでしまった。

父がいない生活は辛いことが多かった。父を恨んだことさえあった。今になって考えると愚かなこともたくさんして、だんだん僕はぐれていった。家族や親戚にたくさん迷惑をかけていたようだ。

そんなある日、僕は父の本棚に残っていた数冊の日記を見付けた。何気無く開いたノートには懐かしい、父の丸文字が並んでいた。少し涙が流れた。そして夢中で父の過ごした日々を追いかけた。癌が発覚してからのものもあつた。検査をしたことや家族が見舞いに来たことが一行一行、丁寧に書かれていた。しかしあるページに差しかかって急に父の文字が乱れ、大きく書き殴るように書かれていた。そこには、「死にたくない。生きたい。このまま家族を残したまま死ねない。まだまだ生きたい」と書いてあつた。猛烈に涙が出た。ただその涙は単に悲しかっただけではなく、自分の今の姿が情けなかつたから出たのだつた。墮落した今の自分が情けなかつた。今この瞬間、自分が生きているのは父が生きたかつた日々なのだと思つた。

高校生になった僕は最近、色々な人に父に似てきたと言われるようになった。精一杯に今を生きることが死んだ父への親孝行なのかなと思う。